

1. 年間目標について

持病があっても健やかで快適な毎日が送れるような支援。また、終末期においても施設生活が安心して送れるよう、多職種間との連携・協働体制を深め必要とされる知識・技術についても共に学習し、最期まで寄り添うことができたことに自負しております。

また、新型コロナウイルスについては、これまで同様、感染防止に努めることはもちろん、日々県や厚労省から更新される情報や通知等、漏れなく収集し、知り得た情報は適宜、現場に周知、それらに係る研修会への参加や勉強会を積極的に行ってきた。

2. 入居者及び職員の健康管理

(1) 健康管理

<p>■ 健康管理についてについて (入居者)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 健康診断 令和4年5月6日 入居者 44 名受診、内有所見者 35 名。要精検者については診察時に確認している。 ➤ 国が定めるところの新型コロナワクチン接種への取り組み 保健師の指示の下、あづま脳神経外科チームにより執り行われた。名簿の作成から手順、当日の采配を担った。 家族への連絡、同意確認、考えられる副反応については事前に電話連絡で了承を得る。 ➤ 保健所管轄で行われるPCR検査については14名の入居者が対象となった。いずれも陰性。 ➤ 入居者の新型コロナ罹患患者2名、インフルエンザ罹患患者はゼロであった。医師の指示の下、隔離期間を経過し快方。 ➤ 制限される事態が生じた際には、必ず家族へ一報入れ、解除の時も近況と共に面会の案内時に報告している。 ➤ 抗原検査 延べ人数 163名に検査施行。
<p>■ 職員の体調管理について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 介護職員の平均年齢も高く、柔軟性と筋力の低下が目立ち、体調不良を訴える職員が目立っている。 ➤ 腰痛対策については、予防法と介護技術の修得及び、福祉用具の購入（個人購入も含め）腰部にかかる負担軽減に努めた。 ➤ 職員のインフルエンザ罹患患者はゼロ。新型コロナについては濃厚接触者として6名、罹患患者 14 名を確認。が、これまでの知識を生かしたことでクラスターには至らなかった。定められた隔離期間を経過し、医師の指示の下、抗原検査陰性を確認後、復帰している。 ➤ 新型コロナワクチン接種の取組み 上記、入居者と同様に実施。

	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 濃厚接触者の疑いがある職員については、出勤前に抗原検査キットにて検査。陰性を確認後出勤としたケースは4件であった。 ➤ 抗原検査キット 延べ人数 120名に検査施行。
<p>■ 健康診断について (職員)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 健康診断1回目 令和4年5月6日 46名が受診。 2回目(夜勤に従事する職員のみ) 令和4年12月6日 25名が受診。共に検診率100% 施設外での健診を受けた職員については、結果の写しを医務室管理とした。 ➤ 職員の3分の1が再雇用となっている。についてはその殆どが何らかの慢性疾患があり、内服薬の処方を受けている。他、それぞれ指摘された事項について、相談と病院受診の必要性を説き対応している。 ➤ 腰痛検査(年2回)については、問診票で調査。半数近くは接骨院などに通院しているのが実情。 “総合的に心配なしと判断”という結果が殆どであった。 ➤ 急性腰痛症、体調不良にて自宅療養を余儀なくされた職員は2名いたが、医療機関の定めた休養を経て復帰に至る。
<p>■ 健康教育について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ コロナ渦ではあったが、オンライン研修のほか、感染予防に努めたうえで外部での研修も行った。 ➤ 自身の体調管理については、個別に相談を受けるなど、健康に関する関心を高めてもらえるよう努めた。 ➤ 感染症委員会には固定した看護師が就き、標準予防策(フルPPE)、ゾーニング等の演習を行った。
<p>■ 受診について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 救急車搬送は1件、介護と看護間の連携と情報を共有することで、比較的速やかな対応ができた。(手遅れという状態は避けられた。) ➤ 経管栄養のPEGチューブの脱落が2度起きている。再挿入するため、臨時の受診を余儀なくされた。 リスクマネジメントからも指摘がある事項である。 ➤ 重症度の高い入居者についても主治医の指示の下、家族への連絡を密にするなど信頼関係を築くことができた。 ➤ 診療については、いいたてクリニックから毎週火曜日に回診と定時薬の処方を受けていた。慢性疾患のみならず、臨時薬や点滴の処方もあり、施設内で寛解できたことは何よりであった。

(2) 疾病の予防(褥瘡対策)

<p>■ 皮膚トラブルの予防</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 早期発見の重要性を周知する。また、速やかな報告が重度化を防ぐことに繋がることも付け加え指示できた。 ➤ 皮膚トラブルがもたらす二次的疾患の特性については、各家会議に参加することで知識を広めることができた。 ➤ 皮膚の状態を健やかにするため、セラミド入り乳液である
--------------------	---

	<p>『キュレル』及び皮膚の状態に合わせベビーオイルまたはアズノール軟膏を個別購入し対応した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 除圧マット・ムートン・ロンボクッションをはじめとする体圧分散用具の導入をしてきたことで終末期に於いても褥瘡はゼロであった。 ➤ 栄養の大事さ、経口摂取がもたらす効果については適宜ケア会議などで話し合い、関心を深めていった。 ➤ 基礎疾患があり抗凝固剤の処方を受けている入居者については、その内容も周知し、皮膚に与える影響についても指示できた。 ➤ 看護師間で検討し、保護剤や被覆材の選択については互いの情報を共有するにとどまった。次年度は開催される勉強会などに積極的に取り組んでいきたい。
--	---

(3) 終末期ケア

<p>■ 看取りについて</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「慣れ親しんだホームで最期を」と希望する入居者や家族が多く、16名の方が施設内の自分の居室で永眠され、入院中に亡くなられた方は1名であった。 ➤ コロナ禍で面会制限を強いられる中、最期の面会だけは可能とした。一人で逝かせたくないという職員の思いからでもあった。そして、できるだけ悔いが残らないように配慮することで信頼関係を継続できた。 ➤ 終末期を考慮し、事務・厨房・介護・看護の全スタッフで関わることができた。 ➤ 主治医である本田医師には毎週火曜日の定期診療に加え、深夜早朝にもかかわらず対応していただき、最期の確認と家族への説明をして頂いた。
------------------	---

(4) 健康管理指導等

① 新型コロナウイルスワクチン

1回目	4/27、/28 職員 50名 入居者 40名	2回目	5/18、/20 職員 50名 入居者 39名	3回目	1/18、/20 職員 48名 入居者 36名
4回目	6/23 7/23 職員 46名 入居者 35名 (新規含まず)	5回目	12/15 1/25 職員 37名 入居者 41名		

※上記は施設内で接種行い、時期をずらしての接種はいちばん館にて6名行っている。

※副反応については、おおむね熱発のみ。呼吸困難などの重症者はゼロ。

② インフルエンザ予防接種

11/22	入居者43名 職員48名	施設内で接種。副反応者なし。
-------	--------------	----------------

3. 通院状況

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
大町病院	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
あづま脳外	0	1	1	1	2	1	0	2	0	0	1	1	10
いいたてクリニック	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	3
くまがみ歯科	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
あんざい整形	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
府野歯科	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
南相馬市立病院	0	0	0	0	1	0	0	0	2	1	0	0	4
延日数(人)	2	1	1	2	4	1	2	3	2	1	2	1	22

4. 入院状況

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
あづま脳外科 (日)	0	0	0	0	0	12	0	0	0	0	0	0	12
大町病院 (日)	0	0	0	0	0	0	0	6	5	0	0	0	11
延日数	0	0	0	0	0	12	0	6	5	0	0	0	23
実人数 (人)	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	3